

# 聞名仏教

第84号  
(発行日)

2017年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 今、ここに在る私とは

今日、宗教というとすぐ敬遠し、自分には必要ないと思

っている人が多い。そういう人は「私は神や仏に救われた」とは思わない。今の生活で満足している」とか「死んで天国に生まれたいとも極楽へ行きたいとも思わない」としばしば言われます。

ですから「どうしたら私たちは仏様に救われるのか」とか「どうしたら浄土へ生まれることができるのだろうか」というような問いは人間にとって特殊な問いの様に感じられるのでしよう。ではそういう人は宗教に関係がないのでしようか。

一方、「どうしたら健康でいられるか」「老後の生活をどうするか」とか「儲かったか損をしたか」とか「勝ったか負けたか」というような問題には非常に関心がありますが、その場合、「老後をどう送ればいいのか」「健康には何を注意したらいいか」「損か得か」などと思い煩っている「私」、その私

とは一体何でありましょうか。

考えたり、喜怒哀楽を起こしたり、いろんなことを毎日行っている「私とは何か」。

こういう問いは暇人か哲学者のいうことで、自分には関係ないと言われるかも知れません。けど「そう言っているあなたはそもそも何なのか」と問いたいのです。「人間です」と答えるなら、では「人間とは何か」と。

もし私とは何かわけがわからないものならば、八十年生きようが九十年生きようが、正体不明のものが、ただ生まれ、ただ生き、ただ死んでいっただけのことにならないのでしようか。

その正体不明の×の私が、若いとか歳を取ったとか、あるいは学歴がどうか、財産がどうか、才能があるとかないとかなどと価値づけ、他者と比較して、煩っています。

もし牛とか猿に生まれたら、それらは遺伝的には人間と近い生き物であっても、おそらく「私とはいったい何か」「今

ここに在る存在は何か」などという問いは起こらないでしょう。同じ動物であっても人間だけが「自己とは何か」という問いを起こし得ます。

こういう問い(後生の一大事)を起こすと、それを縁として人は真実にあう可能性がありましょう。それゆえ仏法では、人間に生まれたことは、尊く有り難いことだ、人間に生まれてこそ真実にあえるのだと言われるのです。

そこで、次に「それでは本当の私というのは何ですか」と問われるなら、これに対する答えもいろいろあるでしょう。真宗大谷派の清沢満之師は「自己とはなんぞや」と問い、

「絶対無限の妙用に乗託して任運に法爾に現前の境遇に落在せるもの」と言い表しました。表現が難しいですが、要するに「自己とは、阿弥陀仏の働きにおいて今ここに存在しつつあるもの」ということです。

私たちは阿弥陀仏の働きの上に、生まれ、生き、死んでいくのであって、阿弥陀仏を一瞬も離れることはできないし、離されないし、阿弥陀仏

と共に今ここにいます。そういう存在が「自己」だと。

ただそういう阿弥陀仏に抱かれ、阿弥陀仏と共にましまし、阿弥陀仏において生きるように求められているということ、これを、「知る」か「知らない」かが大きな問題で、これが宗教が必要な理由といってもいいでしょう。

そして仏教では、「知る」とによって、平安と善とが自然にその人に与えられてきますが、知らないと苦悩と悪が起こってやまない、と説かれています。

万物がそういう阿弥陀仏と離れない存在ですが、人はそれを「知る」ことができます。「知る」ことによって、阿弥陀仏の広大なお徳を人生生活の上でいただいでいく。そして仏の功徳を表わし出すことが可能になってまいります。

逆に「知らない」と、その人にとっては、阿弥陀仏は無きも同然であり、自我と世界(他者と自然)があるだけの世界に生きるほかはありません。

# 清風宝樹をふくときは

(和讃問答)

清風宝樹をふくときは

いつつの音声いだしつ

宮商和して自然なり

清浄勲を礼すべし

宗祖「浄土高僧和讃」

(語釈)

宮商―雅楽で五種類(宮・商・角・徴・羽)の高さの違つた音色。

清浄勲―清浄な薫りの浄土の如来、すなわち阿弥陀仏

(現代語訳)

阿弥陀如来のお浄土には、宝林宝樹が満ちている。そこに清らかな風が吹くと、宮・商など五つの音声は自然に美しく調和してなり響く。清浄な薫りの浄土の主である阿弥陀如来に帰依し礼したてまつれ。

\* \* \*

D「浄土は無量の光明の領域と讃えられています。ここでは浄土は美しい音楽の世界と讃えられています。浄土の経典には浄土は宝の林に風が吹くと美しい音楽が自然に奏でられる世界としても表現さ

れているのです」

N「浄土のお徳を音楽の世界として表されているのですね」

D「ええ、普通浄土は量りない寿命と光で表されたり、寿命と智慧と慈悲であらわされますね。ここでは美しい音声です。ここからは美しい音と光だけでなく音声の徳であらわされています」

N「浄土のお徳を音楽で表されるのは深い意味があるのでしようね」

D「深い意味は私には分かりません。ただ個人的に思うのは、世界はいのちの活動でありその本質は光と音であるといえるかもしれません。音は今日の物理学では〈ゆらぎ〉(振動)であってエネルギーです。いのちとはエネルギーであって、それが光ともなり音ともなる。そしてこのエネルギーは物質的エネルギーと精神のエネルギーに分けられます」

N「世界の本質は音でもあると。難しいですね。それはそうとこの世で感動するのは美

しい光景とか音楽が多いですね」

D「ええ、ですから人間世界の美しい音

楽から、浄土には人間世界よりももっと美しい音楽が響いている、それほど素晴らしい浄土なのだと言えらるるのでしょうか」

N「(宮商和して)といわれるのは？」

D「宮・商・角・徴・羽との五つの音階(古代インドの音階)のことです。西洋音楽の音階は、ドレミファソラシの七音階ですね。浄土の音楽は五つの音階が調和して響いていて非常に美しいのでしよう。和してというのは調和しているさまですね。逆に調和しない音は聞きづらいです。たとえばピアノの演奏会で聴いている最中にゴホンゴホンと咳き込む声が聴こえたら、それは調和しない異質な音と感ぜられ、せっかくの美しい感情に浸っていてもたちまち破られてしまいます」

N「音楽は音と音が連続していく中でああ美しいと感じるのですが、一つの音の次にどういう音が来るかによって、

美しいと感じたり、嫌な感じがしたりします。音が連続するなかで、前後の音に調和しない音が続く、とても聴けるものではないですね」

D「ええ、楽曲は音の連続によるのですが、そこに調和がなければ聴くにたえません」

N「浄土の音楽は(宮商和して)調和のとれた非常に美しい音楽だといわれます。私は音楽、とくにバッハが好きで毎日のように聴いています。流動する一音一音が、美しく感じる所に音が収まっていくので美しく清らかな感情に満たされます。本当に不思議です。落ちてほしいところに音が落ちず、異質なところに音が落ちるととても聴きづら

いですが、バッハの場合落ちるべき所に自然に落ちて、非常に美しいメロディやリズムになるので驚嘆せずにはおれません。そういうのが宮商和してといわれる所以でありましようか。音楽は人間の心をやわらげしめ、感動させ、幸せな気分にしてくれる、本当に不思議です」

D「美しい音楽は心に浸透していきませんが、それは感情の不思議さといえないでしょうか。阿弥陀仏の大悲の情は理

屈や分別を突き破って凡夫の心の深部にいたり届いて下さるように思えます」

N「個人的な話になりますが、インドのシタールの演奏にも非常に美しいのがあります。一度神戸の喫茶店でライブがあり聴きに行きました。その時、シタールの演奏が始まってすぐに涙があふれて、終わるまでの二十分ぐらい泣けて泣けて涙が出っぱなしでした。魂がゆさぶり続けられました。音楽は実に心の深部にしみこむ働きをするのだと実感しました。浄土が非常に美しい音楽の領域だとお聴かせ頂くと、うれしいですね」

D「浄土は人間世界の美しい音楽にすぐること何層倍もの美しさでありましようから、浄土はこい願わずにはおられない世界ですね。ただ浄土の音楽はただ美しいだけではなく、それを聴く者に智慧と慈悲を起こさせる働きがあると先達は教えて下さっています。たんに美しいだけで、それ

に耽溺してしまつて、懈怠になりかねませんが、浄土の音楽は智慧と慈悲の心を起こさせて衆生救済に働きださしめる働きといわれています。これも大事なことです」

# 信心夜話

『松並松五郎さんの手紙』を  
読む。

「先日は有難うございました。南

無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。日  
々夜々、念々の思い、今日今時の  
所作まで、算用が済んで成仏ま  
しました姿こそ、今の南無阿弥陀  
仏なれば、思い思う心は、皆々お  
まけじやがな。これ以上だだをこ  
ねますと、南無阿弥陀仏様がいか  
にもお気の毒やで、今呼んでもら  
うだけでまけて上げては如何です  
か。ちぎれちぎれの南無阿弥陀  
仏、いやいやのままの念仏、念い出  
させての南無阿弥陀仏、南無阿  
弥陀仏と聞くだけで、まけてもら  
いましょうまいか、うまい事や、こん  
なことに、誰がした、南無阿弥陀  
仏。

弥陀が来て 弥陀が連れゆ  
く 弥陀の国 弥陀の国なら  
おいらの国さ おいらの国なら弥  
陀の国

\* \*  
まあ実に有り難い、法味豊  
かな歌です。解説をしてほし  
いという要望があり、あえて  
解説してみました。

『日々夜々、念々の思い、今日  
今時の所作まで、算用が済ん  
で成仏しました姿こそ、今の  
南無阿弥陀仏』

これは、阿弥陀仏は私の心  
に起る思いの全ての全てを底  
の底まで、知り抜き、知り尽  
くして下さった。そして、仏  
に成れるような善きものは凡  
夫の私には全くないというこ  
とを知り抜いて、その上で如  
何にすれば凡夫を仏に仕上げ  
ることが出来るかを長々と考  
えて修行し、凡夫が仏に成る  
種は全て阿弥陀仏が成就して  
喚んで下さる今の南無阿弥陀  
仏であります。

仏に成る可能性の全くない  
私のために、負債（悪業）だ  
らけの私の勘定を、法蔵菩薩  
様は私に代わって修行をして  
負債を完済して、できあがつ  
たのが南無阿弥陀仏。

『思い思う心は、皆々おまけじ  
やがな。』

とは、罪業の借金は全て支払  
い、仏に成らしめると仰せく

ださる南無阿弥陀仏、その南  
無阿弥陀仏を聞く身。その身  
になお「思いや煩惱・妄念」  
が起るけれども、それは「お  
まけ」である。もう私の往生  
は全く如来様に先手に引き受  
けられたのであつて、あと煩  
悩妄念のおまけは、あつても  
なくても往生には関係がない。  
どれだけ「思いや煩惱が湧い  
ても」それに障げられずに、  
仏にして下さる南無阿弥陀仏  
である。

そんな有り難い南無阿弥陀  
仏を聞きながら、私たちの方  
が「こんな心では」とか「こ  
んな私では」とか「こんな状  
態ではアキマセン」といって、

『これ以上だだをこねますと、南  
無阿弥陀仏様がいかにもお気の  
毒や』

との仰せ。阿弥陀様は「今さ  
ら、汝の思いや行いが役に立  
つとも思っているのか。助  
けるのは弥陀の仕事であるぞ」  
と、悲しまれる。

もはや私たちには助かるた  
めに何も用はない。

『今呼んでもらうだけでまけ  
て上げては如何ですか』

で、南無阿弥陀仏と耳に聞か  
していただくだけ、聞くだけ、  
仰ぐだけで、それだけで後は  
何もいらぬ。それだけのこ

とに仕上げて下さった南無阿  
弥陀仏、へこれだけで参らせる  
と。この阿弥陀様に

『まけて上げてはいかがですか』  
とは大胆ですが、有り難い。

そんな有り難い南無阿弥  
陀仏でありながら、この私は

『ちぎれちぎれの南無阿弥陀  
仏、いやいやのままの念仏』

がやつとで、本当に申し訳な  
い。ちぎれちぎれのお念仏も、

我が力ではない、阿弥陀仏が  
『念い出させての南無阿弥陀  
仏』

である。

そして、

『うまい事や、こんなことに、誰  
がした、南無阿弥陀仏』

で、なんとまあこんなうまい  
話はない、こんなに楽な話は  
ない、こんなによくできた不  
思議な話はない。誰が考え、

誰が仕上げ、誰が与えて下  
さるのか。あなた様である、  
南無阿弥陀仏様である。不可  
思議の大悲である。

『弥陀が来て 弥陀が連れゆ  
く 弥陀の国 弥陀の国なら  
おいらの国さ おいらの国  
なら弥陀の国』

で、浄土は誰のためか、私の  
ためである。私のための浄土、  
私の帰る家、待って下さる  
お浄土に連れて行って下さる

南無阿弥陀仏。弥陀が今直接  
に迎えに来てくださっている  
姿が口に出て下さる南無阿弥  
陀仏。その南無阿弥陀仏が「汝  
を連れて行く」と仰せくださ  
る。我が行く先をお知らせ下  
さるだけでなく、まるまる抱  
いて連れて行って下さる。浄  
土は我一人の帰る親里の領域  
ゆえ、お浄土は「おいらの国  
さ」である。また、おいらの  
国であるが万人の帰るべき国  
である。

(了)



《秋季彼岸会》

九月二十二日 (金)

午後二時始まり

# お便り

## T・S氏のお便り。

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの8月号よりの続きです。)

『今に私には、御法の上になんの問題もありません。ただ念仏念仏だけで。それはナニモカモ、ワカッタからでなく、真宗教義の何一つわからぬまま、ただ念仏一つにてお助け下さるといふ「如来の御本意」をただ念仏せよの仰せのままにただかせてもらったからであります。』

(木村無相さんの言葉)

☆私思う。「如来の御本願」は汝の理性や智慧、汝の自力は全く関係ないぞ、ただ弥陀の「乃至十念」を信じて念仏称えてきてくれの仰せだけあります。しかし、凡夫の私にはただ称えてこいと言われても信じられない。現代に生きるものとしてただ称えよが理解できない。あまりにも簡単すぎて難しい。日常の常識で信じられないことを信じるのは無理なのです。理屈で考え

れば永遠に地獄です。しかし本質は、理屈や意識を超えたもつと深く単純なところにあるのです。ただただ弥陀の

願心を憶念し感応する自己の深い悲しみなのです。助からぬと信じさせられた自己の宿業の悲しみこそが弥陀の願心と感応道交するのです。親鸞聖人常の仰せにいわく。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述かいさふらひしことを」と。これ親鸞聖人の深い業の悲しみが弥陀の願心に深く感応したところでないでしょうか。我にそくばくの業がありと信知出来ることが自己への深い悲しみの表現なのです。ここに弥陀の願心「若くは不生者不取正覚」が我が全身を襲うのです。弥陀の信心に我々が獲得されるのでしょうか。

『ただ念仏申すだけの身にならせていただく、「よき人の仰せ」「如来の勅命」のましまにただ念仏申すそのことがオノズカラ本願を信じタノミ、ハカライなく弥陀にまかせ

ることになっているのでした。驚きました。』

(木村無相さんの言葉)

☆自己の自性が極重悪人と念仏に照らされ、「ただ念仏」の仰せがたった一人のこの私のための本願であった、本願相応の悪人の機の私であつたと知れよ。今この自分の顔をよく見よ、念仏の鏡に照らされた自己の素顔を見よ。本願相応のわが浅ましき機ゆえの弥陀の願心であるぞの声を聞くことが弥陀にまかせることなっています。これを本願相応の念仏、本願相応の悪性のわが機といふものでしょう。私思う。「我が機は死ぬまで迷うゆえ、弥陀は我が機の親となり、弥陀の願心 我が安心、ただ南無阿弥陀仏と仰ぐばかり」。

(続く)

## T・K氏のお便り。

三月十七日の御法話を、聞かせていただきました。

大無量寿経の第十八願より「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念若不生者 不取正覚 唯除五逆誹謗正法」

から始まりました。観経の中より、アジャヤの悲劇を出しながら、人は必要なら家族でも手にかけて殺す、と。現在も新聞、テレビに身内による殺傷は後を断たず私にも縁さえ整えば、起こり得ます。正法誹謗は、私は関係ないと長く思っておりましたが、「自分を一番大事、仏様は二の次」と考えることが、それだと教えて頂きました。この事は、死ぬまで改まらないと思えます。

と言うことは、十八願から外れている私。救いようのない私。阿弥陀様からサジを投げられている私、と言うことになりません。

「たのめとは 助かる縁の無き身ぞと 教えて救う 弥陀の喚び声」

私という人間は、お念佛を称えるより他には、お浄土に行ける身ではないと、教えて戴いているのだと思いました。

仏教を聞けば聞くだけ、「聞いた私」を意識して、「迷いの心」も「執着心」も薄らいで行く思いがあるのですが、いつも、自分で自分を計る者のために、十八願は作られたのでは無いと。

私は十八願の外にある、という思いは強烈で、十何年仏

法を聞いてきて「これか」と涙の出る想いです。死は本当に身近に迫っています。清沢満之の「絶対他力の大道」は、面白いけれども間にあいません。やっぱり死後は仏様の所に行きたいから、手を合わせ、頭を垂れ、お念佛を称えて、日々を感謝して日暮らしさせて戴きます。有難うございました。

## 【住職雑感】

八月十一日頃であったか、腕のあたりが痛くて、これは腕の使いすぎの筋肉痛だと思つて湿布薬を貼る。二日たつてもますます痛い。しばらくすると胸のあたりと背中にも赤くはれたようなものが現れ、少しずつ大きくなる。どうも普通の湿疹ではなさそうでおかしいなあと思つてほっておく。余り痛いのので整形外科に行つてみようと思つて盆休だし、私もお参りで忙しい。しびれるような感覚もあり、夜中も痛みで目が覚めると二時間ほどは眠れない。盆明けて、内科行くとヘルペスといわれ、症状が現れて四十八時間以内に薬を飲まないと直りにくいということであつた。抗ウイルスの薬と塗り薬で一週間過ごし、半月過ぎしてやっとかなり痛みが緩和した。肉体的苦痛によつて「この身を厭え。浄土を願え」の教えがより身近に実感できた。